

ネパール、カトマンズのストリートで生きる子どもの日常実践

平成 20 年度編入学

参加したフィールドスクール：ネパール

調査地：ネパール

高田 洋平

キーワード：ネパール、都市、開発 NGO、ストリートチルドレン、日常実践

自身の研究テーマについて

ネパールにおける子どもの生活向上を目指す開発は、生活上の困難に直面している子どもをマイノリティとして集団化し、権利を要求する基盤をつくり出した一方、社会的に開発する/されるという立場の区分を生み、開発する側のエリートと海外ドナーとの癒着、開発のビジネス化といった問題を生み出している。そのような開発のなかで、都市のストリートで生活する子どもは「ストリートチルドレン」として開発の対象として構築され、一方で、開発を拒否してストリートで生活し続ける子どもは「不良少年」として理解されるようになった。そのどちらもが、ストリートで生きる子どもの生活を否定的なものとして捉えてきたが、実際には、子どもたちのストリートでの生活はさまざまな実践とネットワークによって展開されている。

本研究は、ストリートで展開されているそうした子どもたちの日常実践とネットワークについて人類学、地域研究の視点から明らかにするものである。ネパールでは子どもはある時期をストリートで過ごしても、やがて様々なかたちで仕事をみつけ、生活の基盤をつくる。本研究ではカトマンズのストリートで生きる子どもの生活の実態を調査して、開発の対象として構築された「ストリートチルドレン」像とは異なる姿を明らかにし、そこから開発とネパールについてアプローチしてみたい。



写真 1. 乗客を呼び込む仕事の様子



写真 2. ストリートの遊び

フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールでは、研究者だけでなく、開発の実務家、村で生活する人びとと意見交換する機会に恵まれた。意見交換を重ねるなかで、村で生活する人、実務家、研究者など、それぞれの立場によって見えている世界が異なるということを考える機会となった。

それを強く感じたのが、タルー族のコミュニティ、ピンタリ村での女性の識字教室だった。教室は村の女性たちの活気に満ちていた。そこでは、識字についてのことだけでなく、訪問者の私たちについてのこと、そして日常の話題についてのおしゃべりで溢れていた。訪問の後、参加した女性に「いつもこんなににぎやかですか?」と聞くと、「そうよ、ここはみんなと話ができるし、とても楽しいわ」という答えが返ってきた。「識字教室」といっても、そこに参加する人は文字を学ぶことだけが唯一の目的ではないのかもしれないと思い、参加する女性が見ている世界を想像してみた。

開発の実務家であれば、識字率の向上や運営を気にするだろう。研究者であれば、俯瞰的に物事を論じる。村の女性であれば、今日、村であった出来事を話すことを「識字教室」に見ているかもしれない。

世界の見え方にこうした微妙な違いがあることを、フィールドスクールのなかで立場が異なる人との出会いを重ねることで感じる事ができたように思う。



写真 3. タルー族、ピンタリ村の識字教室の様子

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマに生かせるか

今回、開発の実務家、村で生活する人びと、研究者など、それぞれの立場によって見えている世界が異なることについて改めて考えた。私はストリートチルドレンの日常実践についての研究を開発の実践と結びつけたものにしたいと考えているが、そのためには、その人の置かれている立場によって世界の見え方が異なるということ、それについての認識が重要な意味をもってくる。

今回、様々な立場の人と意見交換するなかで改めて考えた「立場による世界の見え方の違い」は、今後の研究において重要な背景として生きると思っている。



写真 4. ボテ・コミュニティで出会った子ども



写真 5 研究機関(マーティン・チョウタリ)にて